

## 「人」が「云う」ことで「伝」える 100年後に伝わるアーカイブを

It Transmits because It Keeps Talking  
Technique of Transmitted Archive 100 Years Later

佐藤正実 Masami Sato

私たち、NPO法人20世紀アーカイブ仙台は、大正・昭和時代の先人たちが残した8ミリや写真などの文化資料を収集・保存し、途絶えがちな世代間のコミュニケーションを提供するなど、過去とのつながりを実感できるようアーカイブ(記録)化し、後世に引き継ぐことを目的に2009年に設立しました。東日本大震災後は、市民から震災画像を募りHPを立ち上げる活動を開始し、2012年3月には震災のなかの市民生活を掲載した『3.11キラクのキロク』発刊、仙台市との協働事業「3.11オモイデツアー」など震災アーカイブもあわせて活動しています。

### 震災後、市民権を得た 「アーカイブ」という言葉

発災から4年4カ月が経過しました。その間、もともとアーカイブ活動とは関係の薄かった個人や団体が、震災の風化を防ぎ後世に教訓を残すことを目的に、写真や動画、音声、文字などを記録する「震災アーカイブ」に取り組む機会がぐっと増えました。「アーカイブ」という言葉そのものも市民権を得たように感じうれしく思っております。

ただ、「集められた素材」イコール「アーカイブ」として語られることが多く、アーカイブが魔法の呪文のように使われ、言葉ばかりがひとり歩きしている感も否めません。素材を集めることだけで、アーカイブが本来取り組まなければならない「未来の人々に事実を伝える」という目的が達成できるのかという点に

ついて考察してみたいと思います。

### 生活感覚や感情を付記した アーカイブへ

今さら言うまでもなく、アーカイブの基本は、「①収集」「②保存」「③編集」「④閲覧」。素材を活用するまでのこれらのルーティン・ワークは、循環して行われひとつとして外せるものはありません。そして、これらのワークのなかで、各個人、団体の特徴がもっとも表れるのが「③編集」であり、アーカイブの利活用を将来的にどうとらえているかという発想の根幹でもあります。

2011年3月11日の大震災から約1カ月後の4月7日夜中に起きた震度6強という最大余震を例に、私が目指すアーカイブを簡単に説明致します。おそらく多くの皆さんは「4月7日？」と首を傾けると思いますので、まず、4月7日はどんな日なのかをご紹介します。当時、余震は相変わらず頻繁に起きていましたが、大震災の発生から約ひと月が経過し、沿岸部を除き仙台はインフラが戻り、後片付けもだいぶん進んで買い物やガソリンも並ばずに手にすることができるようになっていました。1週間後の4月15日には桜の満開宣言が出されましたし、震災後の重い曇囲気がようやくやわらぎ春の陽気を感じていた時です。

その4月7日の深夜に再び震度6強の強い地震が東北を襲いました<sup>図1</sup>。400万戸が停電し、建物はさらに倒壊。余震は止まず、また大地震が来るのではないか

NPO法人20世紀アーカイブ仙台副理事長／1964年生まれ。東北学院大学卒業。2012年3月市民が撮った震災記録誌「3.11キラクのキロク」、2014年12月震災前後の定点撮影写真誌「オモイデピース」を企画・編集・発行。2013年度、2014年度「仙台市震災復興メモリアル等検討委員会」委員

という恐怖感……。もとの日常生活に戻りつつあると感じていた多くの市民の心は折れました。

さて、この時の写真に仮にキーワード付けをしてみましょう。おそらく「4月7日」「23時32分」「M7.1」「震度6強」「建物倒壊」「停電」、そして「撮影者」「撮影日時」「撮影場所」といったところでしょうか。

もちろん、これらの基礎情報は画像検索などで重要な役割を果たすのですが、問題は、そのタグ付けされたキーワードだけで100年後の人々に、この「4月7日」という日がどのように伝わるのか。

4月7日深夜に発生した地震以外にも、震災翌日の朝日を見た時の太陽の心強さ、蛇口から水が出た時の安心感、日々の余震の恐怖、初めてお風呂に浸かって癒された心身……。カタチにはしにくい人の思いや感情を伝えなくては、写真本来の意味が伝わらないはず。機械的に写真から読み取れる情報だけではなく、感情までを記録することでアーカイブは、他地域の方々にも、そして、100年後の人々にも理解してもらえる実用性、実効性を持つものになるのではないかと考えています。

### 「記録」と「記憶」が相まって 初めて自分事として伝わる

東日本大震災の発災から4年4カ月という短期間の経過ではわかりにくいかもしれませぬので、70年前の戦時中の例をご紹介します。

1945(昭和20)年7月10日未明、仙台



図1 2011年4月7日震度6強の地震により、再び家財道具が倒れる [筆者撮影]



図2 空襲により焼け野原となった仙台中心部 [提供:森つき氏]



図3 「3月12日 はじまりのごはん」に展示された写真例 [提供:木谷智寿氏]

に123機の米軍B29爆撃機が襲来。数時間にもおよぶ空襲により炎は天を染め仙台は焦土と化しました<sup>図2</sup>。仙台は約12,000戸が全焼し、死者900人、負傷者1,700人。被災者は当時の人口の26%にあたる57,000人におよびました。

さて、その時の写真を見て私たちはどれだけ空襲について理解できるでしょうか？ おそらく(私も含めて)“焼け野原になった仙台というまち”以外、ほとんど空襲の酷さは伝わらないのではないのでしょうか。

空襲体験者の話によれば、空襲の翌朝、焼夷弾によって全焼した町を広瀬川から定禅寺通を歩いた時の熱い地面や家屋、人体、家畜の焼けたにおいが町中に漂っていたそうです。思い出を語る人の言葉が加わって初めて空襲の酷さが伝わってきます。このような経過を経て写真は“真を写す素材”になるのかもしれませんが。

つまり、「記録」と「記憶」の二つの要素が相まって完成するアーカイブ。どちらかが欠けても後世には伝わらない、あるいは伝わりにくいものになるです。これは、明治、昭和の初めに大津波を警告した石碑が後世の私たちに何を伝えてきたのかを見れば一目瞭然です。保存したらそれで後世に伝わると思い込むのは大変危険だということを知っておかなければなりません。

### 記憶を活用して語るきっかけをつくり出す

仙台市の複合文化施設である「せんだ

いメディアテーク」とはさまざまな事業で共同開催させていただいています。震災写真を撮った方の話を伺う「3.11定点観測写真アーカイブ 公開サロン」というものもそのひとつで、2012年5月から全14回開催してきました。

ある回で、参加者の皆さんに「震災の翌日は何を食べましたか？」という問いかけをしたところ、忘れてしまったという方もいらっしゃる一方で、「電気ストーブが使えたので冷蔵庫にあった野菜を煮て食べた」「インスタントラーメンを50食ほど備蓄していたし、キャンプ用品があったのでしばらくは大丈夫だった」「レトルト食品を備蓄していたが水がなかったので苦労した」という答えが返ってきました。

私たちが注目したのは「食べ物の話を介することで震災後の生活が思い出されること。そして、その記憶を明確に語れること。何よりも震災について語りやすいテーマである」ということでした。

保存食の話からは、災害時に家族や学校、職場で準備しておいたものは何なのかわかりますし、炊き出しの話からは、町内会や商店街の災害時の連携が見えてきます。食べ物に付随して現れる記憶、そして生活全般の様子を知ることができるのです。

これをヒントに、東日本大震災を「食」からとらえてみようという新企画「3月12日はじまりのごはん」を、せんだいメディアテークと開催することになったのが2014年10月。

市民の皆さんからご提供いただいた震

災写真のなかから「食べ物」に関する写真だけを選んで展示し、来場者ご自身の「3.11後、初めて食べたものは？ それはいつどこで？」を思い出してもらい付せん書き出すというイベントを試みました。

仙台のまちなかにいると震災の痕跡を見つけることすらも難しく、もっと酷い体験をした人があるからと震災体験談を語ることを遠慮する方が多いのも事実です。しかし、語る機会が失われてしまえば、それこそ震災の風化は進むばかり。ひとつの写真に市民一人ひとりのさまざまな体験がひも付けられるこのイベントは、震災について無理なく語るきっかけをつくり出す装置のようにも思いました。

### 「人」が「云う」ことで「伝」える

「アーカイブ」を形づくるのはモノではなくヒト。どれだけの数の資料を集めたかが重要なのではなく、市井の声をどれだけその資料に意味付けできるのか。つまり、写真という「記録」に五感の「記憶」を乗せる作業、それが震災アーカイブにも必要不可欠なのではないかと思っています。

4月7日の最大余震の写真しかり、空襲の写真しかり。後世の人たちにとって記録を検証しやすい資料として残すために何が必要なのか。今はまだ答えはわかりませんが、「人」が「云う」ことで、「伝」えると読むように、集う場をつくり口に出して言う、言い続けることをやめないことに、そのヒントがあるような気がしてなりません。